

# 徐訐「春」試論——後景化されつつそこにある戦争

杉 村 安幾子

## 1. 序

作家徐訐 (Xu Xu、1908-1980)<sup>1</sup> は存命中、旺盛な文学創作を行ない、それらは現在、『徐訐文集』(2008) 全 16 巻として読むことができる。<sup>2</sup> そのうち小説が半分以上を占めており、“鬼才”として徐訐の名を高からしめた出世作『鬼恋』(1938) や、新聞連載中の爆発の人気をもって 1943 年を中国現代文学史上、「徐訐年」と称するようになった代表作『風蕭蕭』(1944)、更に自らの自信作『江湖行』(4 巻本、1956-1961) 等が示すように、徐訐は名実ともに小説家として著名であった。

尤もその人気や知名度の高さとは裏腹に、中国文学史における徐訐の地位はこれまで決して高くはなかった。その主な理由としては、前稿でも述べたことではあるが、「近現代中国においては政治的な観点のみから文学作品の良し悪しが語られ、政治的に正しくない作品は悪しき存在と見なされるか、或いはそれこそ文学史から「放逐」されるしかなかった」<sup>3</sup> ことを指摘しておこう。乱暴なまとめの誇りを恐れずにいえば、徐訐の作品が 1930 年代から 40 年代当時の文学の主流とされた社会主義リアリズムでもなければ、わかりやすい革命や抗日愛国精神も描かず、逆に軽視されていた男女の悲恋が作品の主筋であったためである。

実際、1940 年代という抗日戦争期の真ただ中で活動していた徐訐の作品には、戦争を正面から取り上げたものはない。ただ、戦争を直接テーマとしなかった作品については、作家・ジャーナリストであった曹聚仁 (1900-1972) が当時を振り返って興味深い指摘をしている。

取り上げる価値が充分にありながら、そうした文芸評論家達になおざりにされた小説家と作品には、張恨水の幾つかの連載小説、例えば『大江東去（大河東に去る）』や『八十一夢』、銭鍾書の『困城』、それと徐訏が『掃蕩報』で連載した『風蕭蕭』がある。彼らの小説は、公式化された抗戦八股からかなり脱している。彼らは戦争に対し、より多く理解しているとは限らないが、彼らはこの変動しつつある社会や人生を冷静に観察している。時には伝奇的な趣を帯び、物語の戯劇性を高め、その上表現のテクニックは充分にそれらを伝えている。それゆえ一般の人々は抗戦時期の小説について話題にすると、却ってそれらの作品を代表的なものとして見なしているのだ。<sup>4</sup>

「八股」とは紋切り型の無内容な文章の謂いであるが、上記の引用からは、公式的ではないために当時の文芸評論家達からは無視されたものの、戦争を直接的に描かなかつたゆえに逆に当時の社会状況や人々の生を伝え、その時代の精神を表現した作品群は充分に評価する価値があるという、曹聚仁の客観的で主流イデオロギーに容易に流されない姿勢が見て取れる。

本稿は徐訏の短編小説「春」（1948）を取り上げ、「抗日戦争」を鍵として読む試みである。徐訏の代表作『風蕭蕭』が抗日戦争を直接的なテーマとはしていないにしても、中国・アメリカ・日本の美男美女の間諜が、誰が敵で味方が不明なままに大都市上海を舞台に躍動する長編であるのに対し、「春」は一組の男女が出逢って結婚するまでを描いただけの微笑ましい小編である。しかし、「春」が当時の陪都（戦時の臨時首都）であった重慶を舞台にしている点に着目し、作品から見出せる戦争の影、そして基本的に悲恋や悲劇的結末を好んで描いた徐訏にしては珍しいハッピーエンディングの意味を併せて考察の対象としたい。

## 2. 「春」——不釣り合いな恋

「春」は現時点では初出雑誌が不明である。中国の徐訏研究者馮芳氏の調査によれば、1945年12月23日が脱稿日とのことであり<sup>5</sup>、1948年に懷正文化出版

社から刊行された単行本『幻覚』に収録された。他の収録作品は「滔滔」、「屬於夜（夜に属す）」、「旧地」、「幻覚」の4編である。

物語の大筋をまとめておこう。

重慶（地名は明示されていない。この点については後述する）と思しき都市に春が近付いていた。新聞社の近くに、四十過ぎくらいの容姿端麗な婦人がとりしきる小さな煙草屋が出現する。女主人の愛想は良く、明るい雰囲気、煙草屋は繁盛していた。新聞社の面々も、煙草や菓子類を買いに頻繁に訪れていた。新聞社の面々は女主人から、姓は董であること、息子は前線で戦っていること、娘もおり、もうすぐ18歳であることなどを訊き出す。

編集部の楊は毎日その煙草屋へ通っていたが、ある日、煙草屋でいつもの女主人ではなく、一人の少女が店番をしているのを目にする。黒目がちな目の大きな美少女で、女主人の娘であった。少女の美貌は編集部でも一頻り話題となり、楊は同僚にふざけて「彼女と結婚する」とまで言う。数日後、母親が店に復帰した際、彼女は楊に戦争はいつ終わるのかと尋ねる。その後、店番は母親であったり娘であったりし、楊は娘との会話の中から彼女が小学校は卒業し、文字が読めることを知る。ある日、楊は同僚の従軍記者が書いた記事の中に「常德にて中隊長董炳章殉死」の文字を見付け、それが少女の兄であったので心を痛める。しばらく躊躇をするが、楊は少女に兄の戦死を告げ、泣き出す少女に正式な通知があるまで親には伏せているように、今後は君がしっかりして家族を守れと励ます。

日に日に気温が高くなっていくある日の晩、宴会帰りに楊は煙草屋に寄り、少女が煙草を指し出した手に不意にキスをし、自分の行動にうろたえる。更に数日後、友人の結婚披露宴の帰り、酔った楊は煙草屋に上がり込み寝てしまう。翌朝、目を覚まし、ベッドの脇に少女がいるのを見て、慌てて煙草屋を飛び出す。自分が昨晚酔った勢いで少女と関係を持ってしまったのではないかと疑い、困惑する。

煙草屋はその後、母親が店番をし、楊に娘が病気になって寝込んでいると告げる。心配になった楊は友人の医師を連れ、董家を訪ねる。董家は田圃や畑に囲まれ、小川の流れる郊外の小村にあった。楊は董家の夫婦に感謝歓迎され、

少女の病気は大したことはないと知り安堵する。しかしその後も少女は店番には出て来ない日が続いた。ある日、ようやく少女が店番に出て来ると、彼女は楊に突然、もう自分と結婚する気はなくなったのかと問う。楊は例の晩に何かあったのだと確信し、結婚を決心すると同僚に仲人を頼み、翌日には董家を訪れ正式に結婚を申し込む。同僚も集まって賑やかに行なわれた婚礼の翌日、楊は例の晩には実際には何もなく、酔った楊が少女に自分の妻になる気はあるかと尋ねただけだと、今では妻となった少女から告げられる。そして、その時になってようやくお互いの名を知る。楊は名を同龍、少女は名を小鳳といった。<sup>6</sup>

前述のように、徐訏の小説は多くが異国情緒を背景としたドラマチックな悲恋か悲劇的結末であり、それが作風の大きな特徴ともなっているため、この「春」のように長閑な農村を描きつつ「2人は結婚して幸せになりました」という単純でわかりやすいハッピーエンドはほとんどない。ラストで2人の名に示される龍と鳳（鳳凰）については、中国においては古来、龍が皇帝の、鳳凰が皇后の象徴とされるように、男女の理想的な対関係のシンボルと見なされている。結婚するまで互いに名を知らなかった男女が、龍鳳の対であったという結末はまさに微笑ましく幸福なものとして見させる。

ドラマチックな展開がないゆえに「春」に関する専論は少ないが、皆無という訳ではない。例えば、郝明工には『春』は男女の自由恋愛を描いた現代的な物語であると同時に、恋人同士が最終的に夫婦になるという伝統的な物語でもあり、そこから現代と伝統の間である抗戦期の生活において、文化融合が進んでいた可能性の一面が示されている<sup>7</sup> という指摘があるが、この結論に至る前に新聞記者の青年と地元の農村の少女が結ばれる物語は、相互の尊重と相思相愛が互いを隔てる壁を取り除くことになり、「春」は家庭の平和、ひいては全民一致の抗戦勝利の夢を象徴していると論じている。

また、自身も作家である香港の研究者王璞はこの作品について、「物語の鍵は次の点にある。もし戦争がなかったら、このプチインテリである青年編集者と読み書きが少しばかりできるだけの農家の少女は恋人になどなれなかったであろうし、またもし天意とも見えるが、一方でその大半は人為的でもあった誤解が起こらなかったら、この恋人同士は夫婦になどなれなかったであろう。小説

のクライマックスはこの誤解にこそ設定されているのだ<sup>8</sup>と述べている。「もし戦争がなかったら」、主人公2人は結婚は固より恋人同士にすななれなかったはずだ、という王璞の指摘は正しい。中国は古来、婚姻の際には家柄の釣り合いを意味する“門第相当”が重視され、民話レベルでも日本の民話などにある貧しい娘が領主の息子に嫁ぐというような話は少ない。中国四大民間説話の一つ「梁山伯と祝英台」も、彼らが結ばれないのは直接的には祝英台に親が決めた許嫁がいるからであるが、それ以前に梁家と祝家の家柄が不釣り合いであるという要因も大きい。時代が下り現代になっても、“門第”の意味が拡大し、所謂家柄のみならず、男女双方の学歴や職業、家庭環境などをも含んで意味するようになっただけで、婚姻の際の“門第相当”重視の傾向は変わらない。ごく簡単に言えば、王璞の言うようにインテリ青年と農村の少女の恋は実るはずのないものなのである。郝明工論に見られる「互いを隔てる壁」も両者の不釣り合いを指している。

この2つの先行研究については、重要な共通点として「戦争」が挙げられるだろう。前者は主人公2人は元々不釣り合いであったが、相思相愛な婚姻が抗戦勝利の象徴だとし、後者は戦争ゆえに不釣り合いな婚姻となったと見なしているため、因果関係の捉え方は異なるが、「戦争」に着眼しているという点では共通する。そもそも「春」が直接的に戦争を描いていないために、両論は戦争に関しては指摘のみに留まり、それ以上の言及はないが、以下本稿では「春」の1940年代の抗戦期という時代背景、重慶という舞台の持つ意味を改めて探ってきたい。

### 3. 陪都重慶

「春」には具体的な年代や重慶という地名は明示されない。しかし、煙草屋の少女の兄が戦死する常德における日中両軍の戦いが1943年11月から翌44年1月初旬であったことから<sup>9</sup>、「春」は1944年初頭から初夏頃を時代的背景と設定していることがわかる。また作品の舞台は、その当時大きな新聞社のある、坂の多い都市であり、作中で重慶産の煙草の名が挙げられることから、重慶であ

るという指摘ができる。<sup>10</sup>

では当時、重慶とはどのような都市であったのだろうか。「春」の作品世界を考えるに当たり、歴史的経緯を確認しておく必要があるだろう。

### 3. 1. 山と川に挟まれた交通の要衝

そもそも重慶は、長江と嘉陵江という二つの大河に挟まれ「川の半島」のような地形を有し、周囲は山に囲まれた場所に位置する。また、わずか数キロの間に高度差が 120 メートルもある、起伏の富んだ山のような地形ゆえに坂が多く、「山城」とも呼ばれ、秋から春にかけて霧が多く発生するため、「霧都」とも呼ばれる。他方、夏は最高気温が 40 度を超す酷暑ともなり、南京・武漢と並んで「三大火炉（ストーブ）」とも称されている。

遠く商の時代（紀元前 17 世紀初頭から前 11 世紀。「殷」とも言う）には既に交通の要衝として栄えていた。春秋戦国時代、成都を中心とする蜀に対し、巴の国の都として長らく「渝州」と呼ばれていた。

南宋の孝宗淳熙 16（1189）年、孝宗の三男であった趙惇が現在の重慶周辺の「恭州」の王に任命され、父の崩御によってすぐに皇帝に即位したことに基づき、恭州を「府」（州の上位の行政区画）として、「慶びが重なった」という意の「重慶府」に改名されたと伝わっている。<sup>11</sup> 明清時代には人口も増加、商業都市として発展し、長江沿岸随一の貿易港となった。1876 年、清国とイギリスの交わした煙台条約によって、1891 年に重慶港が対外開港。それによって対外貿易が拡大、文化・教育が発達し、インフラの整備も進み、都市として一気に近代化していく。

現代に至っても、1997 年に北京・上海・天津に次いで中央政府の直轄市に選ばれるなど、政治および経済地理上、重要な都市となっている。<sup>12</sup>

### 3. 2. 軍事首都へ

1937 年 7 月 7 日、北京郊外で起こった盧溝橋事件に端を発し、日中全面戦争

に突入。華北日本軍・関東軍は総攻撃を開始し、北平（首都でない時期の北京の呼称）・天津・保定・張家口・太原・済南など、華北の重要な都市を次々と陥落した。南京を首都とする中国国民党政府は9月、中国共産党の間で行っていた内戦を停止、国共合作についての協定を正式に結ぶ（第二次国共合作）。この背景にあったのが「西安事変」である。当時の国民党を主導していた蒋介石（1888-1975）は、まず日本と妥協し共産党勢力の掃討を企図した「安内攘外」政策を掲げていたのであるが、東北軍閥を率いていた張学良（1901-2001）はこの政策に大いに不満であった。張学良は日本軍に奪われて「満洲国」となってしまった遼寧省出身であり、1928年6月、父張作霖を関東軍に爆殺されたため、日本と手を組むという蒋介石の政策は到底受け入れられるものではなかったのである。1936年12月12日、蒋介石が西安郊外の華清池の温泉郷にいたところ、張学良麾下の兵士に襲われ、二週間軟禁された。張学良は西北軍閥の楊虎城（1893-1949）とともに、蒋介石に対し南京国民党政府の改組、内戦停止、愛国指導者及び政治犯の釈放などを求める八項目を要求したのである。

その間、戦争は更に拡大し、1937年12月13日、日本軍は南京を占領、華北華中を手に収めた。それを受け、国民党政府は急遽、首都機能を南京から重慶へと移す。実は戦況の不利を目にしていた国民党政府は、早くも10月29日には国防最高会議を開催し、南京から重慶への首都移転を決めていた。重慶が遷都の候補地となった理由は、3.1.で見たように、第一に長江上流の経済の中心であり、内陸部随一の近代都市であったこと、第二に長江の三峡、北の秦嶺、南の雲貴高原、西のチベット高原など、天然の要害に囲まれていたこと、第三には国民党政府の支配が既に実現していたこと、第四には四川の物産が豊富で、人口が多く、国民党政府はその人的・物的資源への依拠が可能であったことこの4点である。<sup>13</sup> 11月20日、「国民政府移駐重慶宣言」を交付、12月1日には国民党政府主席林森（1867-1943）が重慶における政府の公式業務の開始を宣言している。1938年3月29日、国民党政府は漢口で国民党臨時全国代表大会を開催、蒋介石が総裁、汪兆銘が副総裁に選ばれる。そして対日抗戦の徹底を掲げ、国共合作・抗日民族統一戦線の結成を進めた。

こうして国民党政府は重慶のある四川省を中心とした大後方で、経済面での

困難に直面しつつ抗戦体勢を構築していった。1941年12月8日の真珠湾攻撃を皮切りに、日中戦争はアジア太平洋戦争へと拡大、その結果、それまで怒涛の勢いであった日本軍による占領地拡張の進捗は一気に落ち込み、その後の戦線には大きな変動はなく、1945年8月15日の日本の無条件降伏へとつながっていく。

国民党政府は抗戦終了後の1946年5月5日、南京へと帰還した。<sup>14</sup>

### 3. 3. メディア・教育業界の集中した一大文化都市

一方、日本軍の占領地から、人口が内陸に大移動するという現象が出現していた。戦争の拡大により、人口移動の規模も急速に拡大していく。戦地からの移動先は、主に二つあった。一つは中国共産党の指導する延安を中心とした陝甘寧辺区。延安には抗戦初期に約4万人の知識人が押し寄せた。もう一つは大後方への移動である。特に四川省と雲南省に最も集中した。<sup>15</sup>

また、南京から重慶への首都移転に伴い、国民党系のメディアが次々と重慶に拠点を移していった。前出の曹聚仁の回想を見てみよう。

元々、東北地区の陥落により何人もの青年作家達が関内（山海関以西、嘉峪関以東の地区：杉村注）に逃れ、ほとんど絶望に近い「国を救え」の声を上げながら各地を奔走していた。華北陥落後、東南沿海部で戦いが始まり、首都南京の陥落によって全面抗戦が展開されるに伴い、全国の教育文化界がこぞって大規模に西北地区への移動を開始した。これは中国有史以来、最大規模の文化移動と言えるだろう。天津『大公報』について言えば、彼らは華北の情勢が緊迫したのを目にするや、すぐに『大公報』の中核を上海に移動させた。後に上海の我が軍が退却すると、『大公報』は今度は中核を香港と漢口へ移動させた。更に後に漢口と香港も前後して陥落すると、桂林と重慶へと移動。そして、それは長期戦となった抗戦に勝利するまで続いたのだった。<sup>16</sup>

重慶においては1897年創刊の『渝報』から始まり、プロテスタント系教会新

聞『華西教会新聞』（1899年2月創刊）、カトリック系教会新聞『崇実報』（1904年創刊）、近代国家におけるメディアの重要性に鑑みて創刊された『広益叢報』（1904年4月創刊）、重慶としては初の日報である『重慶日報』（1904年10月17日創刊）、更には商業界の主宰する『重慶商会公報』（1905年8月創刊）など、新聞業界は活況を呈しており、通信社も1920年創立の新四川通信社や新民通信社を始めとして数多く存在していた。そこへ国民党系の中央通訊社、中央廣播電台（中央放送局）、『中央日報』、『掃蕩報』、『大公報』、共産党系の『新華日報』などが移って来たのである。<sup>17</sup> また、商務印書館・中華書局・正中書局・生活書店などの出版社も重慶に居を構えたことで、重慶は成都と並んで中国西南地区における雑誌出版の二大陣地ともなり、抗戦期には文芸雑誌も重慶で続々と創刊していた。作家趙景深（1902-1985）の回想には次のようにある。

太平洋戦争勃発後、私は上海におり、後方の文芸界とは完全に隔離されてしまったと言って良いだろう。昨年2月12日、私は立煌の安徽大学に授業に行った。私は自由区に着けば、古友達に関する知らせが少しはわかるだろうと思っていたのだが、あろうことか、そこも淪陥区上海よりいくらかマシではなかった。ほとんどのニュースは重慶で刊行されていた『文化新聞』で目にした。（中略）ある時、馬一民が重慶から飛行機で戻って来た際に、『文哨』と『抗戦文芸』を持って来てくれたのだが、それでようやく郭沫若・茅盾・老舍ら諸兄の文章を読むことができたのだ。<sup>18</sup>

『文哨』月刊は1945年5月4日に重慶で創刊された文芸誌であり、主編は葉以群であった。わずか3期で終刊を迎えてしまうが、上記の趙景深の回想にもある通り、郭沫若・茅盾・老舍・艾青・周而复・呉組緝・艾蕪ら錚々たる作家陣が執筆しており、当時における影響力は相当なものであった。また、『抗戦文芸』は1938年5月4日に、中華全国文芸界抗敵協会の会報として漢口で創刊された。編集委員会は当時各地に散っていた作家・文人の中から代表的な33名によって組織され、3日に一度刊行していたものが週刊になり、一旦停刊した後、同年10月に重慶に拠点を移して復刊するなど、戦況に左右されながらも、抗戦

時期における唯一の全国誌であった。各地の作家が相互に連携を取りつつ編集業務を行っていたところからは、当時、戦禍や中国の広大な国土面積をもともしない、文人・作家同士のネットワークが構成されていたと見ることができるだろう。既述の郭沫若・茅盾・老舎の他、当時の主要な作家が多く執筆・寄稿した。<sup>19</sup>

抗戦中に重慶で創刊された文芸雑誌には、他に以下のものがある。

誌名	概況
『詩叢』月刊	1942年3月創刊。2期で停刊するも1945年に復刊。晏明、宋珣等が主編。詩歌の大衆化と抗戦への貢献を主張した。
『文壇』半月刊	1942年3月創刊。全9期。徐霞村、姚蓬子、老舎、趙銘彝編集。鄭伯奇「二十年代的側面——郭沫若先生与初期創造社」など、史料価値の高い文章を多く掲載した。
『詩家』叢刊	1942年9月創刊。不定期刊行。禾波、屈楚編集。全3集。リアリズムを提唱し、愛国主義を鮮明に打ち出した。
『時与潮文芸』	1943年3月創刊。創刊時は隔月刊、後に月刊。全27期。孫晋三主編。創作と翻訳を重視し、姚雪垠の長編小説『五月的鮮花』、臧克家の叙事長詩『感情的野馬』などを掲載。
『天下文章』	1943年3月創刊。全12期。徐昌霖等主編。「戦後平和問題特集」など抗戦期ならではの特集を多く組んだ。
『中原』月刊	1943年6月創刊。全14期。郭沫若主編。文芸理論、小説、詩歌を中心とした総合文芸誌。艾蕪「火車上」などを掲載。
『書学』半年刊	1943年7月創刊。全5期。書道専門雑誌。
『文風雑誌』月刊	1943年12月創刊。韓侍桁主編。時事論文の他、小説、詩歌を掲載。茅盾、老舎、夏衍などが寄稿。

こうした新聞界・出版界の発展には、それまでメディアや出版の中心地であった上海、北平が陥落し、更に武漢、広州、香港も日本の手に落ちると、多くの作家・文人達が一斉に重慶、成都、昆明、桂林、西安、延安などの西南・西北地区を目指したという事実が背景にある。これらの都市は環境が安定してお

り、作家・文人達が文化活動や執筆をしやすいという利点があった。その結果として、こうした都市群は中国の文化史・期刊史において重要な地位を占めることになる。<sup>20</sup>

高等教育機関も続々内陸へ移転した。最も有名なのは、北京の北京大学と清華大学、天津の南開大学の三校が合体して設立した雲南省昆明の西南聯合大学であるが、重慶にも南京の中央大学（現在の台湾国立中央大学）、上海の復旦大学や交通大学（現在の上海交通大学）等 30 校余りが集中した。<sup>21</sup>

このように、重慶は抗戦期の政治・経済・軍事の中心であったのみならず、文化の一大中心地でもあった。

### 3. 4. 空爆の標的に——「重慶爆撃」

抗戦期、重慶は首都であったことで、日本軍によって「戦政略爆撃」という名称を公式に掲げて実施された、世界初の「意図的・組織的・継続的な空中爆撃」の標的となった。1938年12月18日に開始し、1941年9月まで断続的に行なわれた所謂「重慶爆撃」の舞台だったのである。これは日本陸海軍航空部隊による大規模な都市無差別爆撃であり、蒋介石率いる国民党政府の屈服を期したものであった。とりわけ1939年5月から1941年9月までの2年4か月間に行なわれた組織的継続的な空爆は激しく、重慶市のみで218回に及び、死者10,499人、負傷者14,901人、倒壊家屋9,570棟に上るといふ。

2006年3月、この重慶爆撃の被害者が原告となり、日本政府に対し謝罪と補償を求め東京地方裁判所に提訴した。この「重慶大爆撃賠償請求訴訟」は2015年に一審敗訴、原告側はすぐさま控訴し、今なお東京高等裁判所で係争中である。

日本軍が空爆による敵方屈服を狙った理由は以下の3点であった。

まず、重慶が西南部奥地に位置し、長江の急流と大巴山脈・巫山山脈に遮られて、陸軍及び海軍艦艇による接近が困難であったという地理的な理由。第二に、武漢三鎮（武昌・漢口・漢陽を指す：杉村注）の攻略後、日本軍の動員能力が限界に達し、兵站の維持が不可能と判断されたこと。即ち、兵站の負担の

少ない航空部隊の投入が選択されたという、日本軍の兵站事情である。第三は、長距離爆撃に不可欠な航空機の調達が、海軍の九六式陸上攻撃機の運用化によって見通せるようになったという軍用機事情である。重慶爆撃のための航空戦力の集中は、最盛期に海軍機が 300 機以上であり、当時としては類を見ない規模であった。<sup>22</sup>

防空体制が貧弱且つ対策が不十分であった、言わば完全に無防備であった重慶が標的になったことで、都市重慶の被った害は壊滅的であり、当時の世界戦史上空前のものであった。爆撃が重慶という都市そのものを対象としたことで、重慶市街は兵士同士が戦う所謂「戦場」ではなく、否応なしに一方的な「戦地」となり、被害の多くは非戦闘民である一般庶民の住居と身体に及んだ。当然、これは戦時国際法に規定される「軍事目標主義（戦時において非軍事目標に対する攻撃を許さないという原則）」の違反である。ここに重慶爆撃の「大量無差別性」を見て取ることができる。<sup>23</sup> 重慶市民は、連日昼夜を問わず容赦なく行なわれた爆撃を「疲労爆撃」と呼んだ。空襲警報が鳴るたびに防空洞に避難し、警報解除までそこで爆撃の恐怖に堪えねばならず、肉体的・精神的な疲弊を余儀なくされたからである。

この重慶爆撃は無論、上記の通り重慶市内に甚大な被害をもたらしたのであるが、1939年5月3日及び4日の爆撃は、重慶爆撃の全期間中、最大の死者をもたらした。当時の国民党総裁蒋介石は5月5日の日記に「日本の残虐非道はまことに卑劣で、恥知らずも甚だしい。今回の件は私が生を受けて以来、初めての大惨事となり、目にするに忍びないほどだ。神に心があるのなら、このように暴虐で残忍な敵に対し、なぜさっさとその報いとなるべき罰を与えないのであろうか」<sup>24</sup>と記した。この両日の爆撃によって、市内にあった10の新聞社も全て壊滅した。その結果、中国メディア史上珍しい現象が起きる。「重慶の各新聞社は日本の爆撃により、社屋・設備などの大部分が焼かれ、市内の十の新聞社——中央日報、大公報、時事新報、掃蕩報、国民公報、新蜀報、新民報、商務日報、西南日報、新華日報——が連合版を刊行、山の洞窟の中で編集印刷を行なった。これは同年10月12日まで続いた」。<sup>25</sup> 国民党系と共産党系の新聞社が手を組み、合同で連合版を印刷したという事実は、日本という共通の敵が

いる抗日戦争時、国共合作が行なわれたゆえの極めて稀な事態であったと言えるだろう。

### 3. 5. 徐訏 重慶へ

1938年、徐訏は2年間のフランス留学から帰国する。留学を切り上げての帰国については徐訏自身の詳しい回想はないが、当時の徐訏の様子が窺える小説が日本にある。フランソワーズ・サガンやシモーヌ・ド・ボーヴォワールの翻訳で知られる朝吹登水子<sup>あさぶきとみこ</sup>（1917-2005）の半自伝的小説『愛のむこう側』（1977）である。朝吹はフランスのパリ大学ソルボンヌに留学中、徐訏と出逢っていた。『愛のむこう側』はあくまで小説であるが、徐訏をモデルとした在仏留学生の中国青年兪是北京大学出身、パリ大学ソルボンヌ留学中で心理学や社会学を聴講、詩作の趣味があるなど、徐訏自身の経歴や当時の境遇と合致する。<sup>26</sup> その兪と朝吹の分身たるヒロイン紀川紗良<sup>きのかわさら</sup>のやりとりを見てみよう。1937年晩秋のパリが舞台である。

「ぼくはね、もう少しフランスに残ろうか、あるいは母国に帰るべきか、実は悩んでいるんですよ」

と兪が口を切った。（中略）

「やはり自分の国が重大な時機に直面している時、詩を書いてなぞいられません。ぼくの学友たちは今月末にでも帰国すると言っているんです。ぼくも彼らといっしょに帰るべきでしょう。それはわかっています。にもかかわらずパリに心残りがあるんです」

「……………」

紗良は何か言おうとして言葉が喉につかえた。（日本人の私がどういう慰め言葉を口に出せるというのか……）<sup>27</sup>

1937年7月の盧溝橋事件によって日中全面戦争が開始していることに鑑みれば、外国滞在中の中国人青年のこうした感慨は何ら不思議なものではない

だろう。<sup>28</sup>

さらに兪は12月、帰国の決意をし、紗良を呼び出して別れを告げる。

「シナの何処へ？」

「重慶」

〈重慶、重慶〉紗良は心の中でこの都の名をくり返した。悲しみと怒りが彼女の胸を押し潰した。〈この私も加害者の一味なのだ〉(中略)

兪は決心をしたようにいっきに後をむくと、二、三步あるき、それから急に駆け出した。彼は右手で顔を蔽って駆けていた。黒い鈴掛の並木の下を走る長身の兪の後姿を、紗良は呆然として見送っていた。突然、彼女の両眼に涙が湧き上がり、その涙の嗚咽が彼女の胸元をしめつけた。

〈兪、兪！殺されないで！〉紗良は心の中で力いっぱい叫んだ。

もう兪の姿はなかった。暗闇のずっと奥に彼の姿は消えていた。それがあたかも歴史の大きな黒い淵に呑みこまれたかのように思われて紗良は戦慄した。

〈重慶へ、重慶へ〉

ヨーロッパから、多くのシナの青年たちが重慶へと出発して行った。紗良はそのあわただしい足音を聞いた。そして、それは次第に重い軍靴の音に変わっていった。

徐訥は恐らくほぼこのような別れを経て、帰国したと思しい。しかし帰国後、上記の引用にあるように直接重慶に向かった訳ではない。当時既に孤島となっていた上海に落ち着き、小説を執筆したり雑誌の編集を務めつつ、留学中に離れ離れになっていた妻子とようやく一緒に暮らせるようになっていた。帰国後の生活の場として上海が選ばれたのは、上海がその時点でなおも中国最大級の文化都市であったことと、徐訥の故郷である浙江省慈溪に近いことも理由であっただろう。

1941年8月、徐訥は妻趙璉と協議離婚をする。離婚の直接の原因とされているのは、妻趙璉の不倫である。徐訥は帰国後、同郷の友人、作家の蘇青(1914-1982)・李欽后夫妻と近所に住み、家族ぐるみで親しく付き合っていたの

だが、趙璉と李欽后が不倫関係になったのである。この離婚騒動については、蘇青が自伝的小説『結婚十年』（1944）<sup>29</sup>にまとめ、当時わずか半年で9刷を重ねるベストセラーになった。

次いで同年12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争勃発。徐訐は活動の拠点を重慶に移す決心をする。翌42年5月3日、徐訐は上海を離れ、陸路と水路をつなぎつつ6月5日に桂林に到着。桂林で三か月過ごした後、9月に重慶に到着する。旅の道中は日本軍の攻撃や徐訐自身の病気発症などがあり、かなり厳しいものであった。重慶において、徐訐は国立中央大学師範学院国文系教授の職と中央銀行での職を得る。前者は中央大学師範学院国文系主任の伍叔儻の紹介であった。

1942年9月と言えば、重慶爆撃終了の1年後である。都市が完全に元の貌を取り戻していたとは考えづらい。恐らく、焼け跡が残る状態であっただろう。その中で徐訐は『風蕭蕭』を執筆し、1943年3月1日から『掃蕩報』での連載が開始、『掃蕩報』をして洛陽の紙価を高からしめた。そして1944年、徐訐は『掃蕩報』の駐米特派員として渡米、ニューヨークとウィスコンシンに滞在する。抗戦勝利を経、1946年8月に帰国した。

#### 4. 春に仮託された恋と戦争の影

既述のように「春」の脱稿は1945年12月とされている。徐訐自身の経歴に照らせば、アメリカ滞在中の執筆であったことになる。既に抗日戦争が終了し、国共内戦は続いていたが、外国に身を置く中国人としては一旦精神的な落ち着きを得たという時期であろう。

「春」の舞台を重慶にしたことは、徐訐が渡米直前まで重慶にいたためであろう。そして更に、故郷からも近い上海ではなくあえて重慶を選んだのは、推測の域を出ないが、若い男女の幸福結婚譚を書く際に妻との離婚の地を避けたためではないかと考えられる。

「春」にはタイトル通り春の雰囲気が満ち溢れ、主人公の男女の恋の芽生えとともに配置されている。

陽の光は暖かく、坂には木々の間に萌え出でる若葉の気配がたちこめていた。彼は春だなあと感じた。

煙草屋の前まで行くと、楊氏は突然、店の窓の中の人物が変わっていることに気付いた。一人の少女がうつむいてはすに座っていたのだ。彼は少し立ち止まると、近付いて行った。(中略)

「華福(煙草の銘柄、重慶産：杉村注)ですか？」彼女は白く輝く歯をちらっと見せて尋ねた。

「そうだ」彼は礼儀正しい微笑を浮かべつつ答え、内心ではこう思っていた。「こんなに綺麗な娘だったのか！」(中略)

彼は暖かな陽の光の中、煙草を吸いながら町へ向かった。バスに乗るまでずっと彼女のことが忘れられなかった。

「春」においては、春という季節と楊の体調や心理状態がまるで連動しているかのようであり、煙草を指し出した少女の手に不意にキスをするのも「一種の不思議な春の暖かさを感じた」ためであった。楊が病気の少女の見舞いに董家を訪れた日には、「田畑の緑がまるで体に貼り付くようで、楊は張医師と歩きながら愉快に感じ」、董家では少女の前で居心地の悪さを感じていたが、少女のベッドの傍の茶卓には「明るい黄色の黄梅が一束生けられ、少しだけ青緑の葉がそれを引き立てている」のを目にし、その黄梅越しに少女を見、去り際には大声で「お宅のこの黄梅は本当に綺麗ですね」と口走って去って行く。この楊の振る舞いが、少女の美しさを賛美する代替行為であることは明らかである。更に「雲があり、陽の光は濃くなったり淡くなったりで、坂は緑にけぶったようで、春風が吹く度にその緑の気配が彼の服の隙間から入って来るように」感じられる暖かい日に、楊は少女から「楊さん…、あなたは私を妻にする気がなくなってしまったのですか？」と問われ、彼女との結婚を決意するのである。楊は少女を抱きしめ、自分の顔と少女の顔が触れると「彼女の頬の涙の跡を感じ、それが冷たいようでも熱いようでもあり、その温度こそを彼は本当に春なのだなあと感じた」。そして、2人は「時は春、月の光が緑の草地の上で流れるよう

に輝き、そよ風が吹くと濃淡の様々なさざ波の起こる」晩に婚礼を執り行なったのであった。

実際には何事もなかった一晚を、何かあったかのように楊に思わせ、不釣り合いな結婚にまで至ったことで、前出の王璞の論は楊が少女の恋愛の奸計に落ちたものと解釈し、「春」を諷刺的な色彩のある作品だと見なしているが、爛漫たる春の描写と男女二人の恋の気配が作品全体を相乗効果的に覆っていることは否定できない。情景描写のイメージで登場人物の感情や深層心理を表現する手法を、徐訏の特徴とする分析もある。<sup>30</sup>

しかしその一方で、春の暖かな気配が一瞬消えるのは、楊が少女の兄の戦死を知る日であった。

初春の天候は寒かったり暑かったり、降ったり照ったりである。ある日、楊は少し風邪気味だったので外出しなかったが、午後小劉から現地レポートの原稿を受け取り、嬉しくなって封を切ると読み始めた。

小劉が知らせて寄越したのは常德での戦役についてであり、何人かの勇敢な兵士の壮烈な戦績についても言及されていた。その中に次のような一段があった。「中隊長董炳章は部隊を率いて秘かに敵の後方に近付き、機関銃の陣地を奪い、敵方を殺すこと無数に至る。最終的には敵に囲まれ、数時間は持ち堪えるも殉死した」。

暖かくのどかな春の描写が続く中で、「寒かったり暑かったり、降ったり照ったり（原文：忽冷忽熱，時雨時晴）」という表現は、楊の体調不良の原因が気温の急な低下であることを容易に想像させる。続いて少女の兄の戦死が与えるインパクトは、取りも直さず本作が戦時重慶を舞台にした作品であることを読者に強く想起させる。

作品の冒頭、煙草屋の女主人が新聞社の男性達に息子は前線へ行っていると告げ、「おたくは戦前も小さい店だったの？」「ここよりはずっと大きかったんですよ。あの頃は息子もおりましたし、戦争じゃなかったんで、生活も楽でした」という会話を交わすように、彼らのいる町で戦争があったことと恐らく戦

争のせいで以前の店舗はなくなってしまったことが示されている。ここでの「戦前」は重慶爆撃以前を指しているだろう。重慶爆撃終了後、町自体は復興し穏やかになりつつあったのかもしれないが、女主人が「いつ戦争が終わるかご存知ですか」と楊に尋ねたことは、息子が兵士として前線で戦っていることで、煙草屋一家にとって戦争は過去のものではなく、「今まさに戦時中」であることを顕著に物語っている。そして、息子の戦死は、楊が想像するように「爆弾が彼女の家に落とされ、完全に彼女達の家を崩壊させる」ものであったに違いない。実際、楊が少女に兄の戦死を知らせると、少女はカウンターに突っ伏し、体を震わせながら泣いてしまう。

「春」における戦争に関する記述は短く、徐訏の筆致も淡々としており、それ自体に重い意味はないかのようである。その意味では「戦争」は後景でしかなく、物語の中心ではない。しかしながら、「春」の作品世界はまさに実際に空爆を経て、復興しつつも、人々が戦争の終結を願う都市重慶を舞台としているものなのである。日本に譬えて言えば、仮に1945年の秋か冬の広島或いは長崎を舞台とする小説があったとして、物語の主筋が恋愛譚であったとしても、日本人読者が8月6日・9日の原爆投下を全く意識せずに読むことがあり得ないように、「春」が1944年の重慶を舞台としている以上、中国人読者が「抗日戦争」を鍵にせず読むことはない。「春」は主人公2人の恋と結婚を明るく照らしているが、その光の陰では3. 4. で確認した重慶爆撃の焼け跡や前線での戦いなどが確実にその存在感を主張しており、抗日戦争は言わば「春」という作品の陰画なのである。

## 5. 結び

徐訏は「春」の直前に『旧神』という小説を書いている。<sup>31</sup> 上海を舞台としており、女性には厳刑で臨み、男性には寛大な裁決をする劉判事が、夫殺しの女性に20年の懲役刑を科すが、その女性こそかつて若きロマンチストであった劉判事が恋い焦がれて袖にされた女性微珠であったという物語である。徐訏人気を支えたドラマチックな恋愛要素を含む悲劇的展開の作品群の一つと言える

が、その直後に、人気作の陰に隠れているような「春」が執筆されたという事実は興味深い。

微珠は裕福な男性との結婚のみを考えている女性として描かれ、劉判事の真摯な愛は彼女に裏切られ拒絶される。アメリカの研究者 F.H.グリーンは『旧神』について「取り返しのつかない喪失感」を描いているとし、「この大きく漠然とした喪失感は『旧神』において、愛に満たされず、裏切られた、正義漢の品格ある判事に関する憂鬱な雰囲気の記事を通して描かれているが、(中略)それだけにより一層回想の中で際立っているように見える」<sup>32</sup>と述べる。グリーンには「春」についての言及はなく、『旧神』についても上記の指摘のみに留まっているが、1942年8月の離婚以降、1945年末までの徐訏の創作活動は詩作が中心であり、執筆した小説は長編『風蕭蕭』、短編『旧神』、『春』の3篇のみであることも含めて考えると、『旧神』の劉判事の一種のミソジニーには徐訏自身の離婚が影響しているのではないだろうか。「愛に満たされず、裏切られた」劉判事の姿は、妻の不倫に大きな打撃を受けた徐訏に重なる。しかしその一方で、「春」を通して、『旧神』とは対照的とも言える重慶の春の穏やかな農村風景と男女の愛の心温まるハッピーエンドを描いた。徐訏において、内に癒えぬ傷を抱えつつ、それでも抗日戦争の完全な終結とそれをもたらす平和に安堵する複雑な感情の揺らぎがあったのであろう。

『旧神』や「春」を除くと、滞米中はほとんどなされなかった徐訏の小説創作は、帰国後に旺盛になり、1950年5月の香港移住後、一層活発になっていく。そしてそれらの作品は、基本的に大都市を舞台とした、憂いを帯びた悲劇的展開のものが中心であるが、1人の少年の流浪の日々から出家までを描いた『江湖行』や反共小説『悲慘的世紀』(1977)など、力の籠った大作も増える。その中で「春」は、小さな作品ながらも、徐訏の創作史と抗日戦争という中国近代史の大きな交点として、徐訏及び中国現代文学史を考える上で重要な存在であると言える。

<sup>1</sup> 徐訏の経歴及び作風については拙論「徐訏『鬼恋』試論——悲恋への序奏」(『言語文化論叢』(金沢大学国際基幹教育院外国語教育系紀要)第21号、2017年3月)に詳しい。

<sup>2</sup> 上海三聯書店刊行。全16巻の内訳は第1巻から第8巻が小説、第9巻から第12巻が散

文、第13巻から第15巻が詩歌、第16巻が戯劇である。

<sup>3</sup> 注1前掲拙論。

<sup>4</sup> 曹聚仁著『文壇五十年』東方出版中心、1997年。

<sup>5</sup> 馮芳「徐訐五十年写作詳細年表」[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_ccd02d160102v39r.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_ccd02d160102v39r.html) 2014年11月1日公開（2017年11月30日閲覧）

馮芳氏のブログによれば、上記年表を含めた徐訐に関する研究専門書を刊行予定であったが、諸々の事情により刊行が遅れているために、先にインターネット上で研究成果を公開することにしたとのことである。16巻本の上海三聯書店版『徐訐文集』には初出誌や脱稿日などの記述はないため、馮芳氏の研究の意義は大きく、徐訐の研究専門書の正式刊行が待たれる。

<sup>6</sup> テキストは『徐訐文集』第6巻（上海三聯書店、2008年）に拠る。また、「春」の引用は全て本テキストに基づき、拙訳を付す。

<sup>7</sup> 郝明工「試析抗戰時期重慶中短篇小説的敘事特徵」『重慶社会科学』2005年第2期。

<sup>8</sup> 王璞「非幹愛情，不是懷春——細讀徐訐小説『春』」、『多元文化語境中的華文文学——第十三屆世界華分文学國際學術研討會論文集』山東文芸出版社、2004年。

<sup>9</sup> 日本では「常德殲滅作戰」として知られる。劉大年・白介夫編、曾田三郎・谷渕茂樹・松重充浩・丸田孝志・水羽信男訳『中国抗日戦争史』（桜井書店、2002年）を参照。

<sup>10</sup> 「春」の先行研究は全て、作品の舞台が重慶であることを前提としている。上掲注7・注8以外では尹瑩著『小説中的重慶——国統区小説研究的一個視角』（華中科技大学出版社、2014年）が徐訐の「春」と「歌樂山の笑容」を簡単に紹介している。

<sup>11</sup> 重慶の地名の由来については羅永祿「“重慶”名称的由来」（『牛城晚報』2008年2月26日第12版）を参照。[http://www.xtrb.cn/epaper/ncwb/html/2008-02/26/content\\_40311.htm](http://www.xtrb.cn/epaper/ncwb/html/2008-02/26/content_40311.htm)（2017年11月30日閲覧）

<sup>12</sup> 管維良、水盛涼一訳「重慶の歴史と文化」（『東北学院大学論集・歴史と文化』第50号、2013年）などを参照。

<sup>13</sup> 戦争と空爆問題研究会編『重慶爆撃とは何だったのか——もうひとつの日中戦争』（高文研、2009年）を参照。

<sup>14</sup> 抗戦期前後の史実及び重慶に関する記述は、張模超他主編『中国現代史』（重慶大学出版社、1996年）、郭卿友主編『中国現代史』（中央民族大学出版社、1997年）、奥村哲著『中国の現代史——戦争と社会主義』（青木書店、1999年）、光田剛著『中国国民政府期の華北政治——1928-37年』（御茶の水書房、2007年）、市古宙三著『中国の近代』（河出書房新社、1990年）、石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』（東京大学出版会、2004年）を参照。

<sup>15</sup> 注9劉大年・白介夫前掲書。

<sup>16</sup> 注4曹聚仁前掲書。

<sup>17</sup> 孫同川主修、重慶市地方志編纂委員會総編輯室編『重慶市志』第一巻（四川大学出版社、1992年）によれば、『中央日報』は1938年9月15日に湖南省長沙から、『掃蕩報』は10月1日、『新華日報』は10月25日とともに武漢から、『大公報』は11月1日に漢口から重慶に移転している。

<sup>18</sup> 趙景深『文壇憶旧』上海北新書局、1948年。

<sup>19</sup> 唐沅他編『中国現代文学期刊目録匯編』下巻(天津人民出版社、1988年)を参照。『抗戦文芸』の33名の編集員とは以下の通り。武漢にいた王平陵・田漢・安娥、老向、老舍、呉組細、宋雲彬、郁達夫、胡風、胡秋彦、徐炳昶、姚蓬子、馮乃超、夏衍、陳西滢、舒群、陽翰笙、葉以群、楼適夷、穆木天、錫金、豊子愷、羅蔗、重慶にいた葉紹鈞、昆明にいた朱自清、成都にいた朱光潜、周文、延安にいた成仿吾、西安にいた鄭伯奇、香港にいた茅盾、長沙にいた張天翼、上海にいた鄭振鐸、広州にいた鍾天心である。また、『文哨』と『抗戦文芸』ともに創刊日が5月4日であるのは、1919年5月4日に始まった抗日・反帝国主義運動に端を発する「五四運動」を記念してのことであろう。

<sup>20</sup> 蔡斐著『重慶近代新聞伝播史稿(1897-1949)』(重慶出版社、2017年)、蔡斐著『重慶近代報業図史初編(1897-1949)』(重慶出版社、2017年)、王洪祥主編『中国現代新聞史』(新華出版社、1997年)、周葱秀・涂明著『中国近現代文化期刊史』(山西教育出版社、1999年)を参照。

<sup>21</sup> 注9劉大年・白介夫前掲書を参照。

<sup>22</sup> 注13戦争と空爆問題研究会編前掲書を参照。なお、死傷者の数や被害の規模については、爆撃の地域や期間の不統一によって諸説ある。また重慶大爆撃賠償請求訴訟の裁判結果については、「加害と被害の事実は東京地裁が認定——重慶大爆撃裁判で原告敗訴」(『週刊金曜日公式ブログ・週刊金曜日ニュース』2015年3月19日 <http://www.kinyobi.co.jp/kinyobinews/2015/03/19/> 2017年11月30日閲覧)を参照。

<sup>23</sup> この日本の国際法違反は戦後、起訴項目に盛り込まれなかったため、極東国際軍事裁判で裁かれることはなかった。理由は単純明快で、もし重慶爆撃の違法性が裁かれれば、戦勝国であった米英両国も、東京大空襲について糾弾されることになるためである。注13戦争と空爆問題研究会編前掲書に拠る。

<sup>24</sup> 張秀章編著『蒋介石日記揭秘』下巻、團結出版社、2007年。なお、『蒋介石日記』(1917-1972)は蒋介石の子孫が米国スタンフォード大学フーヴァー研究所に寄贈し管理と公開を委託、一部の手稿が公開されたものの未公開。

<sup>25</sup> 劉紹唐主編『民國大事日誌』第一冊、傳記文學雜誌社、1973年。民国28(1939)年5月6日の記事。

<sup>26</sup> 朝吹登水子著『私の巴里物語 一九五〇～一九八九年』(文化出版局、1989年)には「私の小説『愛のむこう側』(新潮社刊)に出てくる兪はこの許で、兪という名前は、今から十年余り前に彼が中国文学の学会で東京に来た時、彼自身が自分に命名したのである」とある。徐訐の姓が“許”となっているのは、朝吹の記憶違いと思われる。“許”は“徐”に発音がかなり近い。

<sup>27</sup> 朝吹登水子著『愛のむこう側』新潮文庫、昭和58年(新潮社単行本初版は昭和52年)。徐訐と朝吹登水子との関わりについては拙論「徐訐と朝吹登水子」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第36号、2017年4月)に詳しい。

<sup>28</sup> 例えば、同時期にパリ大学に留学していた作家の錢鍾書(1910-1998)・楊絳(1911-2016)夫妻も1938年に帰国している。楊絳著『我們仨』(生活・読書・新知三聯書店、2003年)には次のようにある。「私達は国や家族を思い、かなり気を揉んでいた。奨学金はまだ後一年は延長できたのだが、私達は急遽帰国することにした。当時パリは戦争の影響を受け、帰国の船のチケットは買いつらい状況であった。私達は人伝でリヨン大学を通じて

---

チケットを入手し、三等で帰国した。1938年8月のことである」。

<sup>29</sup> 1943年、天地出版社。『結婚十年』において蘇青は「蘇懷青」、夫の李欽后は「崇賢」、徐訏は「余白」、趙璉は「胡麗英」として描かれている。

<sup>30</sup> 金鳳著『徐訏小説的詩性品格研究』中国社会科学出版社、2016年。

<sup>31</sup> 注5 前掲馮芳「徐訏五十年写作詳細年表」によれば、『旧神』の脱稿はニューヨーク滞在中の1945年12月18日。「春」の脱稿の5日前である。なお、『旧神』は1950年に香港夜窗書屋から単行本として刊行された。

<sup>32</sup> Green, Frederik Hermann. *A Chinese Romantic's Journey through Time and Space: Cosmopolitanism, Nationalism and Nostalgia in the Work of Xu Xu (1908-1980)*. Ph.D. Diss. New Haven: Yale University, 2009, p.261.

【附記】本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた挑戦的萌芽研究「中国現代文学における通俗小説——Xu Xu・Wumingshiを中心に」（課題番号：15K12869）と基盤研究（C）「日中戦争時期重慶における民族主義文壇と国民党系知識人の内陸都市間連携」（課題番号：17K02642、研究代表者：大阪教育大学・中野知洋）による研究成果の一部である。